

# ペルシア語専攻

🌐 ペルシア語の着実な運用能力を身につけ、言語を基盤にイランおよび西アジアの文化と社会を深く探究しようとする、知的好奇心にあふれた人を求めています。



シェイフ・ロトフォッラーモスク(イスファハーン)

ペルシア語はインド・ヨーロッパ語族に属し、英語やドイツ語などとは親戚関係にある言語のひとつです。その言語資料の歴史はかなり古く、古代ペルシア語は紀元前6世紀以降アケメネス王朝の王たちが碑文で用いたのに始まります。

私たちが勉強するのはイランがイスラム化された7世紀半ば以降、9～10世紀にかけて文章語として確立された近世ペルシア語です。この言語は、イスラムの影響で、文字はアラビア文字を用い、大量のアラビア語の単語が借用語として入ってきています。

ペルシア語はもともとはイラン南西部の一方言でしたが、イラン文化の発達と拡大に伴い、中世にはイランだけでなく、東は北インド、アフガニスタン、西はトルコ、北は中央アジアにわたる広大な地域で公用語、学術語として用いられ、イスラム世界においてアラビア語に次ぐ重要な地位を占めました。その名残が現代のタジキスタンのタジク語やアフガニスタンの公用語の一つであるダリー語です。これらの言語は、名称こそ異なれ、実体はペルシア語です。

また、多くの優れた文学作品がペルシア語で書かれました。ゲーテは散文学の古典『カーブスの書』やハーフェズの抒情詩集を耽読し、その啓発を受けて『西東詩集』が生まれたと言われています。とくに詩文学に優れ、19世紀のフィッツジェラルドの英訳で世界中に名声を博したオマル・ハイヤームの『ルバイヤート(四行詩集)』、フェルドウスィーによる英雄叙事詩『王書』、イラン人がもっとも愛好するサアディーの『薔薇園』など世界文学史上に名を留める名作が数多くあります。

イラン文化は東西文化交渉史においても大きな活躍をしています。シルクロードを経てイラン文化が日本に渡来し、少なからざる影響を与えたことはもはや常識となっています。美術では、建築、庭園、陶器、絨毯にも名品が少なくありません。

こうした豊かな伝統に支えられたイラン文化をペルシア語の学習を通して学んでいきます。

「サラーム」

# سلام

学生の声



3年 中山 敦貴

皆さん、大学生活4年間を、ペルシア語とイランに託してみませんか?! 実はイランは、政治的にも経済的にも文化的にも「中東の台風の目」と言っても過言ではない、爆発的パワーを秘めた大国です。とはいえペルシア語は、日本で生活する上では全く「要らん」言語かもしれません。しかし、だからと言って、ペルシア語に見向きもしないのは余りにも勿体ない!

イランは日本とは縁もゆかりも無い国だと思っていませんか? いいえ、違います。意外にもイランは、大変な親日国なのです。昔、NHK連続テレビ小説の「おしん」がイランで放送されるや否や、空前の大ブームを巻き起こし、視聴率が90%を超えたとか。健気なおしんの姿が、イランの人々の心を掴んだのです。イランに旅行に行くと、あちこちで「どこから来たの?」と声をかけられます。日本と答えると、「オシん! ホンダ! シンゾーアベ!」と、知っている日本語を並べて大はしゃぎ。日本人というだけで熱烈な歓迎を受けます。

青空に溶け込むようなコバルトブルーの大モスク、いっぱい水をたたえてゆったりと流れるザーヤンデ川、草むらに寝転がって暢気に詩を口ずさむおじさんたち。「危険」、「反米」、「砂漠」…イランに対して持っていた負のイメージが砕け散り、心地よい驚きが胸を打ちます。その度に、ああ、ペルシア語を専攻してよかったな、と実感します。皆さんもペルシア語専攻に来て、「固定観念を壊す旅」に出てみませんか?



留学体験記



4年 水野 さくら

「ペルシア語ってどこの言葉なの?」ペルシア語を勉強していると話すとき必ず聞かれる質問です。この時やっと、世間ではそれほど馴染みがなく珍しい言語だということ思い出します。ペルシア語を学んで4年、入学当初は文字にすら見えなかった、右から左へ書くこの言語も、遠いイランという国も、今では私たちにとても身近なものに感じられます。

歴史の授業で聞いた「イスファハーン」という地名が耳に残ったという安易なきっかけでペルシア語を選択した私ですが、すっかり夢中になり、昨年は8ヶ月現地に語学留学もしました。興味深い授業や、先輩方の体験談に、いい意味で毒された結果だと思います。授業では言語だけでなく、文化や歴史、文学、ニュース、民話など、イランについて様々なことを学ぶことができます。また、専攻内での行事には先生方も積極的に参加され、イランの習慣に基づく行事を自ら開催されることもあり、文化理解や体験を聞くためのとても良い機会になっています。中東地域は危険だという情報が流されがちですが、その中で物事を正しく見る視点も授業や研修を通して養われているのではないかと感じます。

ペルシア語専攻でなければ会うことのない世界にも、そんな遠い世界のことについて一緒に話せる仲間にも、経験と知識に溢れる先生方にも出会え、ここで学んだこと、経験したことが自分の中で本当に大切な一部となっています。

